

蜘蛛流大工棟梁横田氏の墓股・笈形絵様について

— 横田家大工文書の研究(6) —

Consideration on the Design Style of “Kaerumata” and “Oikata” made by the Yokota Family, as the Master Builders of the Kumo School

白井 裕泰*

Hiroyasu Shirai

1. はじめに

横田氏は、東北地方において蜘蛛流と呼ばれる大工集団を形成し、江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産を行った大工棟梁である。

本研究は、「蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について」、「蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について」^{注1)}の分析に引き続き行うものであり、蜘蛛流大工棟梁横田氏が建築した作品にみられる墓股・笈形絵様の変遷を体系的に把握することを目的としている。また横田家大工文書の中で墓股・笈形絵様図を基本資料として取り上げ、横田氏の建築作品における墓股・笈形絵様と比較することによって、名称不明の絵様図がどの建築作品に用いられたかを特定できることを期待している。さらには近世に公刊され

た木割書における墓股・笈形絵様と比較することによって、横田氏の墓股・笈形絵様の特色を明らかにする。

2. 木割書における墓股・笈形絵様

横田氏の絵様を分析するにあたって、ここでは墓股・笈形絵様を取り上げることにするが、江戸時代の代表的な木割書として須原屋茂兵衛蔵版の大工雛形書があり、その中で絵様を取り扱われているとして表1のようなものがある^{注2)}。ただし「大工絵様雑工雛形」は岐阜屋(正文堂)清七が版元であるが、参考資料としてここにあげておく。

ところで麓和善氏他は「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」^{注3)}において墓股絵様の変

表1 近世における主な絵様雛形書

No.	絵様雛形書名	著者名	刊行年	備考
01	大匠雛形 彫物絵本	鈴木重春	正徳4年(1714)	全5冊の内2冊
02	匠家絵様集	官匠廣丹晨父	宝暦9年(1759)	全2冊
03	新撰雛形 五 絵様	小暮甚七	宝暦10年(1760)	全5冊の内1冊
04	大和絵様集 四	立川小兵衛	宝暦13年(1763)	全4冊
05	彫工雛形	二柳先生	文政10年(1827)	全1冊
06	当世いろは絵様集	奴長兵衛	天保5年(1834)	全2冊
07	大工絵様雑工雛形	落合大賀範国	嘉永3年(1850)	全2冊

*住居学科

遷過程について次のように指摘している。

まず『大匠雛形彫物絵本』から『秘伝匠家絵様集』までは、渦文・線形しか見えないが、すでに肩と脚元内側に渦付きの突起が付いたものや、肩が二段に重なったものが見える。

次いで宝暦九年刊の『新撰大工雛形五』からは、その脚元内側の突起がさらに延びて中央で接し、内部の透かし部分が格狭間風になり、また外側に延びた脚元も異常なほどに長くなったものがあらわれる。

以後この二点は、この種の墓股の一般的特徴となる。またこの頃から全体が波・雲・植物のものもあらわれはじめ、次第に具象模様が多くなっていく。

そして天保五年刊の『いろは絵様』からは、左右非対称のものも見え始め、また嘉永三年刊の『大工絵様雑工雛形』における「司馬温公図」のような故事を題材にしたものもあらわれるなどますます装飾的になっていく。

すなわち近世における墓股の変遷を次の3期に分けて、その特徴を整理している。第1期（『大匠雛形彫物絵本』（正徳4・1714年）～）は「肩と脚元内側に渦付突起が付いたり、肩が二段に重なる」。第2期（『新撰雛形五』（宝暦10・1760年）～）は「脚元が長大化し、内側に延びた突起が中央で接する。また全体が植物または天象」。第3期（『当世いろは絵様集』（天保5・1834年）～）は「具象模様で左右非対称」。

以上の指摘を踏まえて、各大工雛形書における墓股・笈形を詳細にみることにする。

大匠雛形 彫物絵本（正徳4・1714）

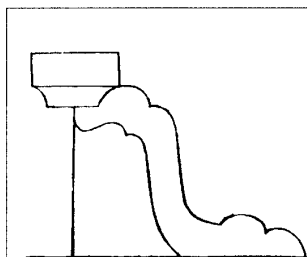


図 2-01：墓股／肩・足先に1つのくびれをもち、腰が同じ幅で延びている通常形の墓股。

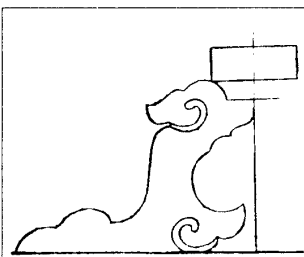


図 2-02：墓股／肩および足元内側に渦付木鼻が付いている。

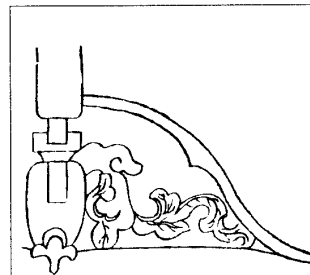


図 2-03：笈形／肩に渦付木鼻，足元内側および足先は植物の葉となっている。

匠家絵様集（宝暦9・1759）

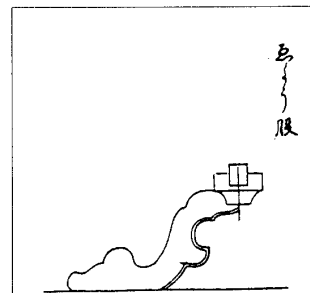


図 2-04：墓股／全体として通常形の墓股であるが、腰内側に線形をもっている。

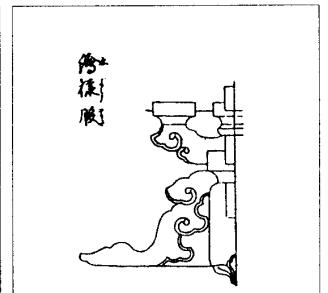


図 2-05：笈形／肩・肩内側に渦付木鼻，足元内側に線形を付けている。

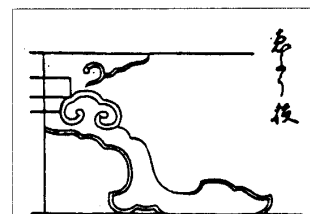


図 2-06：墓股／肩に渦付線形，足元内側に線形を付けている。

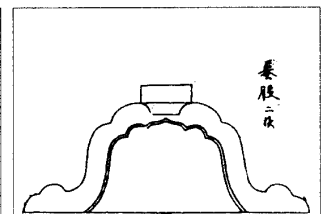


図 2-07：墓股／通常形の墓股。

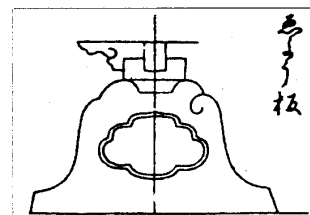


図 2-08：墓股／肩のくびれに渦が付き，足先にくびれがない。左右の足元内側が繋がり，枠内は格狭間になっている。

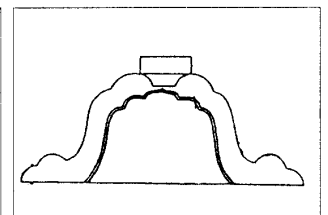


図 2-09：墓股／通常形の墓股。

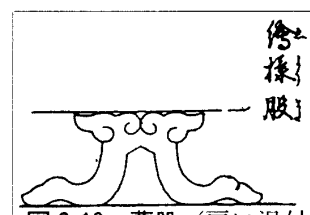


図 2-10：墓股／肩に渦付木鼻が付き，足先が長く伸びている。

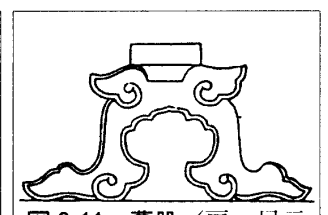


図 2-11：墓股／肩・足元内側に渦付木鼻を付けている。

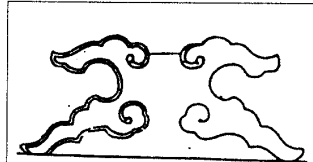


図 2-12 : 蓑股／肩の線形が長く伸び、足に2つのくびれをもち、足先から腰内側にかけて渦が付いている。

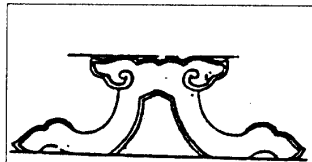


図 2-13 : 蓑股／肩に渦付木鼻が付き、足先が長く伸びている。

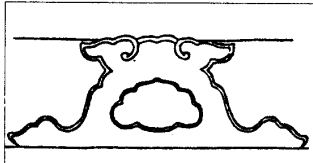


図 2-14 : 蓑股／肩に渦付木鼻が付き、枠内が格狭間となっている。

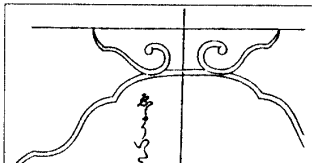


図 2-15 : 蓑股／足先にくびれがなく、枠のない板蓑股。

新撰雛形 五 (宝暦 10・1760)

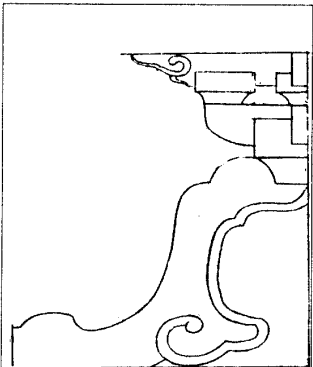


図 2-16 : 蓑股／通常形の蓑股の足元内側に渦付木鼻を付けている。

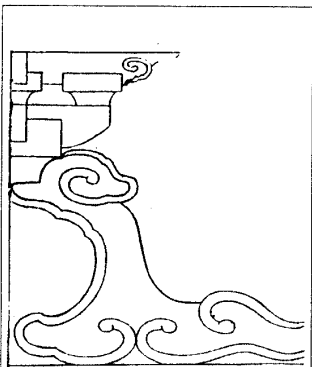


図 2-17 : 蓑股／肩・足元内側・足先に渦付木鼻を付けている。枠内は格狭間様の形になっている。

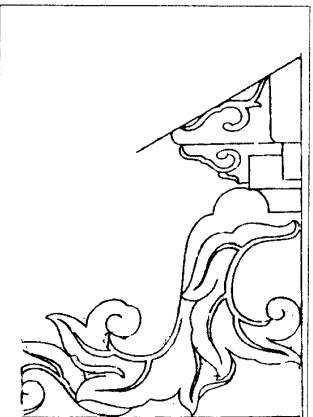


図 2-18 : 笈形／腰から足元内側・足先にかけて植物の葉となっている。葉先の一部が渦玉となっている。

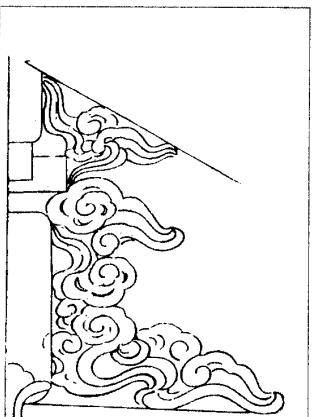


図 2-19 : 笈形／全体が雲水化している。

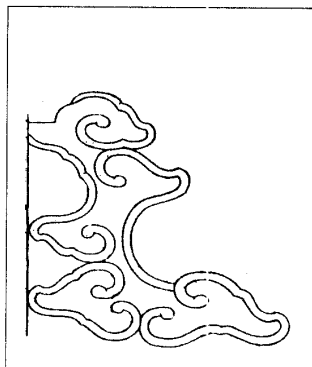


図 2-20 : 笈形／肩に2段の渦付木鼻、腰内側・足元内側・足先に渦付木鼻が付いている。

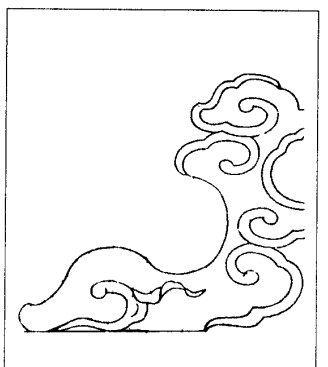


図 2-21 : 笈形／肩に2段の渦付木鼻、腰内側・足元内側に渦付木鼻、足先に渦若葉付木鼻が付いている。

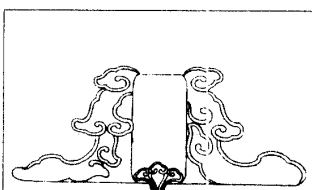


図 2-22 : 笈形／左側の笈形は肩・腰の内外に渦付木鼻、足元内側に2つの渦付木鼻が接して付いている。右側の笈形は肩・腰外側に渦付木鼻、腰内側に2つの渦付木鼻が接して付いている。

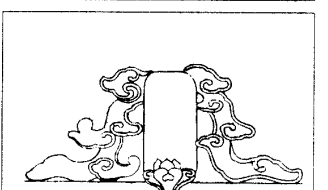


図 2-23 : 笈形／左側の笈形は肩・腰内外・足元内側に渦付木鼻が付いている。右側の笈形は肩の内外に2段の渦付木鼻、腰の内外と足先に渦付木鼻が付いている。

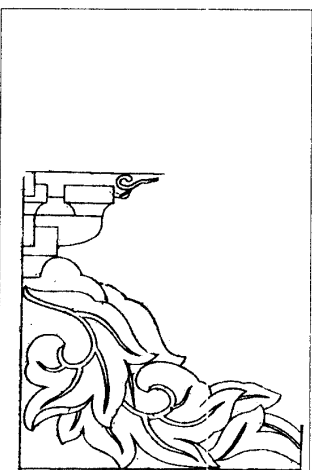


図 2-24 : 笈形／全体が植物葉化している。

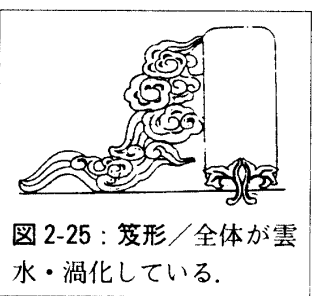


図 2-25 : 笈形／全体が雲水・渦化している。

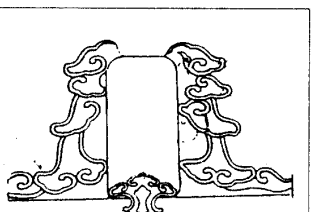


図 2-26 : 笈形／肩に2段の渦付木鼻、腰が渦付木鼻で一旦切れ、足元内側に2つ接した渦付木鼻、足先に渦付木鼻が付いている。

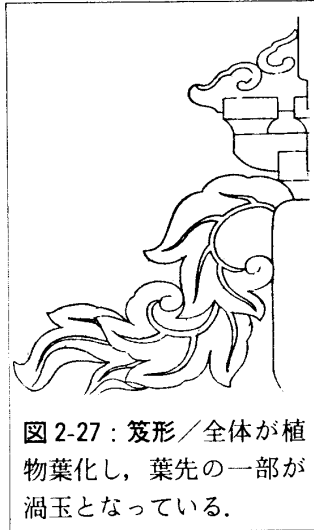


図 2-27：笈形／全体が植物葉化し、葉先の一部が渦玉となっている。

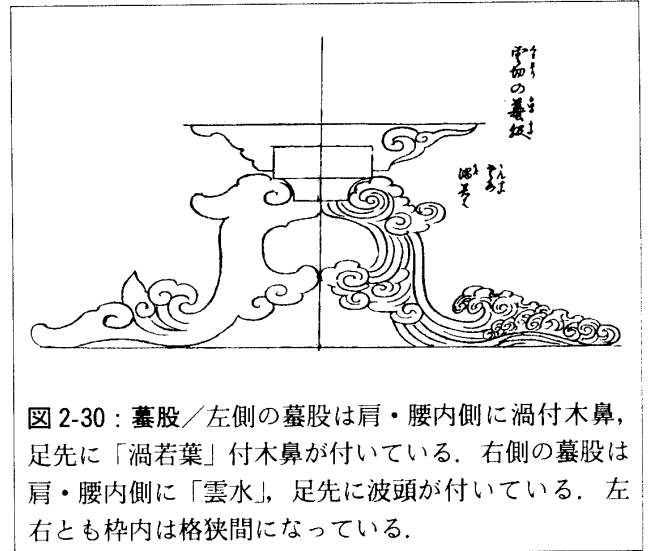


図 2-30：墓股／左側の墓股は肩・腰内側に渦付木鼻、足先に「渦若葉」付木鼻が付いている。右側の墓股は肩・腰内側に「雲水」、足先に波頭が付いている。左右とも枠内は格狭間になっている。

大和絵様集 四（宝暦 13・1763）

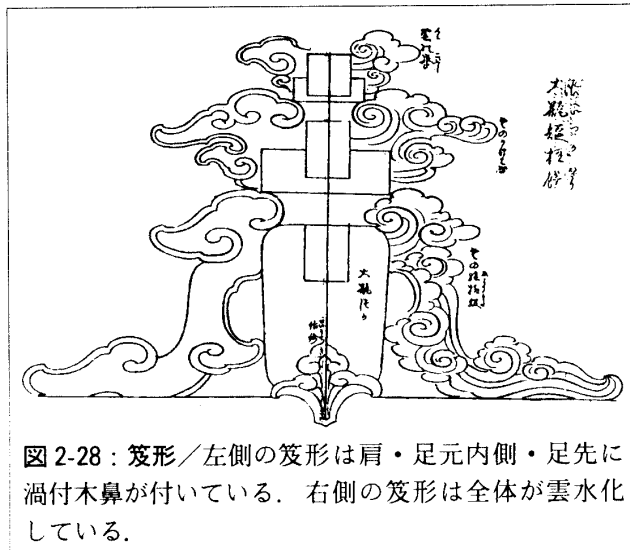


図 2-28：笈形／左側の笈形は肩・足元内側・足先に渦付木鼻が付いている。右側の笈形は全体が雲水化している。

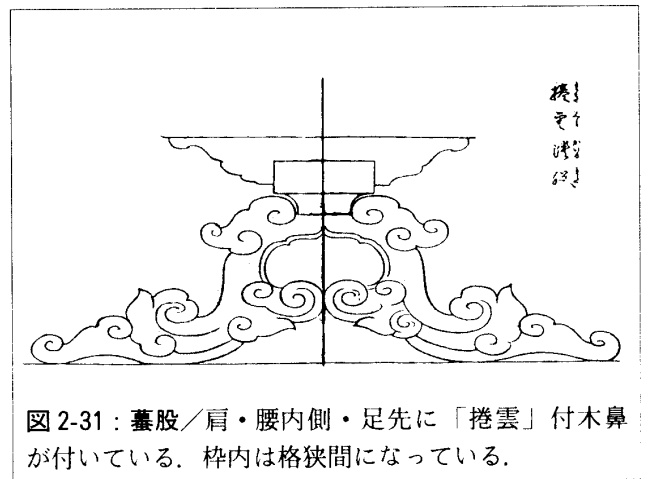


図 2-31：墓股／肩・腰内側・足先に「捲雲」付木鼻が付いている。枠内は格狭間になっている。

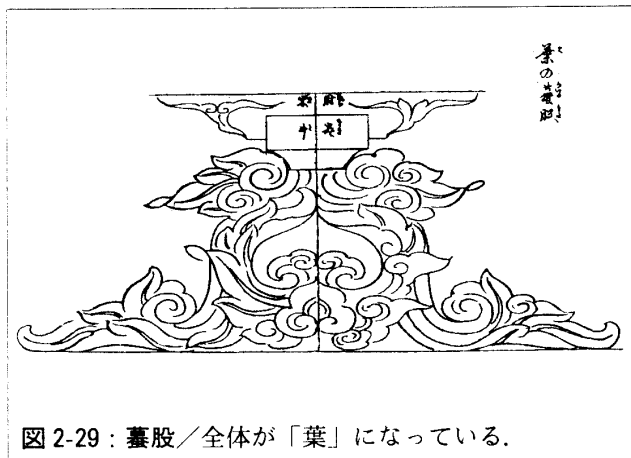


図 2-29：墓股／全体が「葉」になっている。

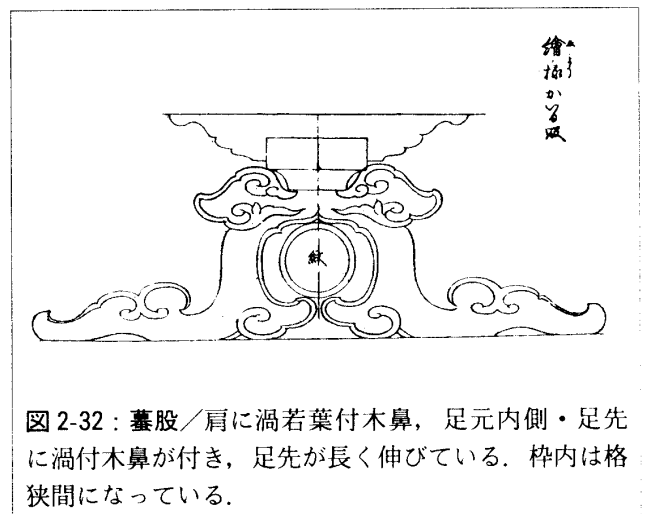


図 2-32：墓股／肩に渦若葉付木鼻、足元内側・足先に渦付木鼻が付き、足先が長く伸びている。枠内は格狭間になっている。

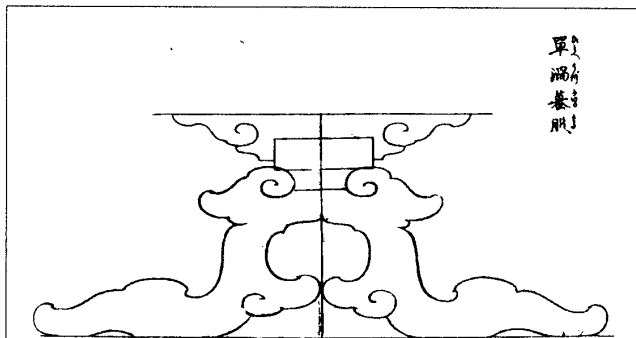


図 2-33 : 墓股 / 肩・腰内側に「単渦」付木鼻が付き、足先が長く伸びている。枳内は格狭間になっている。

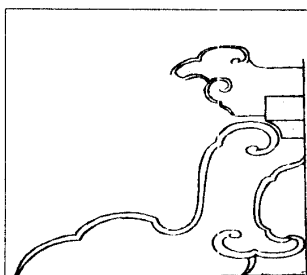


図 2-38 : 墓股 / 肩に渦、足元内側に渦付木鼻が付いている。枳内は格狭間になっている。



図 2-39 : 墓股 / 全体が若葉化し、葉先の一部が渦玉となっている。

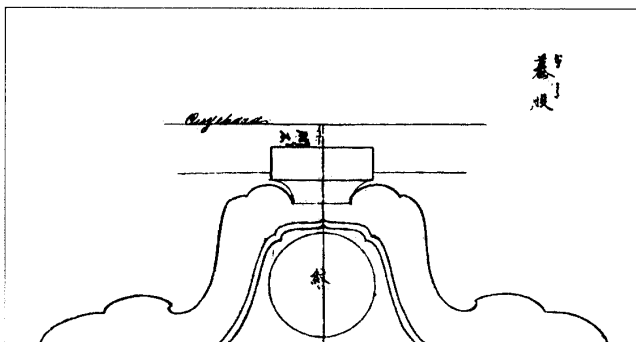


図 2-34 : 墓股 / 通常形の墓股。

彫工難形 (文政 10・1827)



図 2-40 : 墓股 / 全体が流水・波頭化し、左右非対称形となっている。

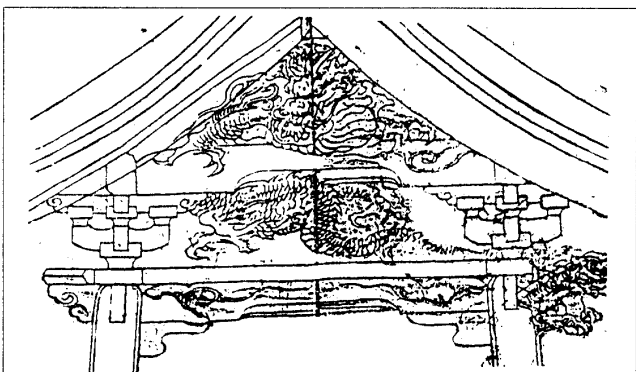


図 2-35 : 欄間 / 台輪と妻虹梁の間に龍の彫物が付いている。

当世いろは絵様集 (天保 5・1834)

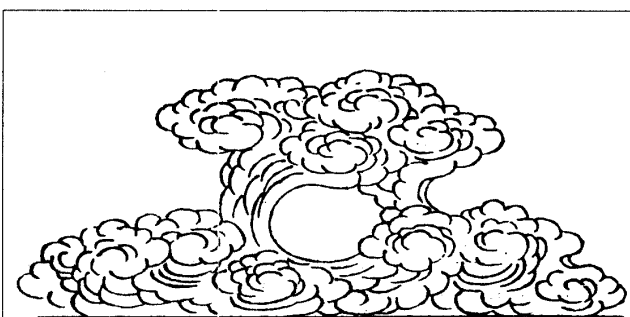


図 2-41 : 墓股 / 全体が雲化し、左右非対称形となっている。



図 2-36 : 墓股 / 肩・腰内側に渦付木鼻が付いている。枳内は格狭間になっている。



図 2-37 : 墓股 / 肩に渦付木鼻が付いた墓股と斗・肘木が一体となっている。枳内は盲連子になっている。

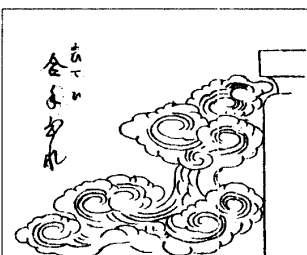


図 2-42 : 笈形 / 全体が雲水化している。

大工絵様雑工雛形 (嘉永3・1850)



図 2-43: 墓股 / 「司馬温公図」の故事を題材にした彫物となっている。

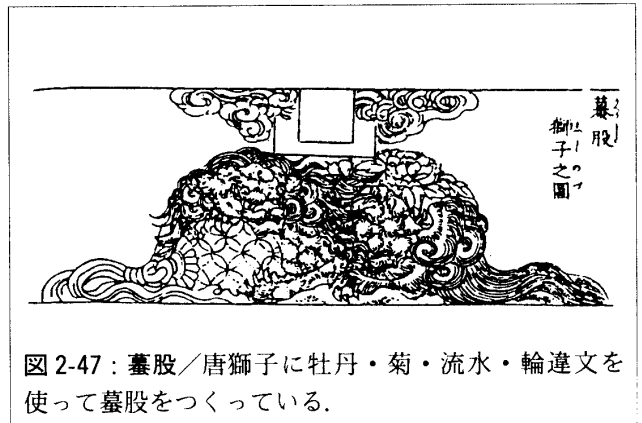


図 2-47: 墓股 / 唐獅子に牡丹・菊・流水・輪違文を使って墓股をつくっている。

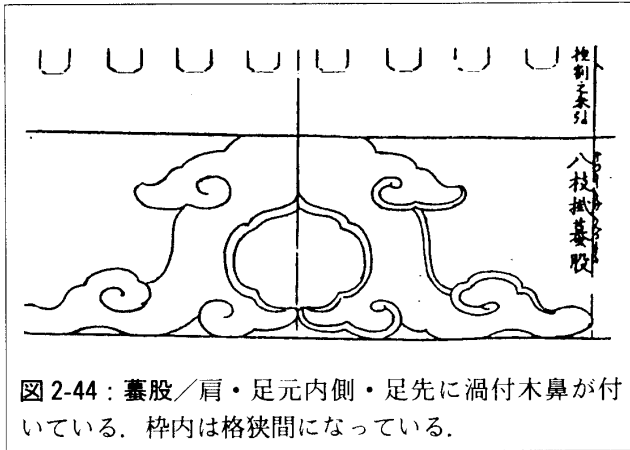


図 2-44: 墓股 / 肩・足元内側・足先に渦付木鼻が付いている。枠内は格狭間になっている。

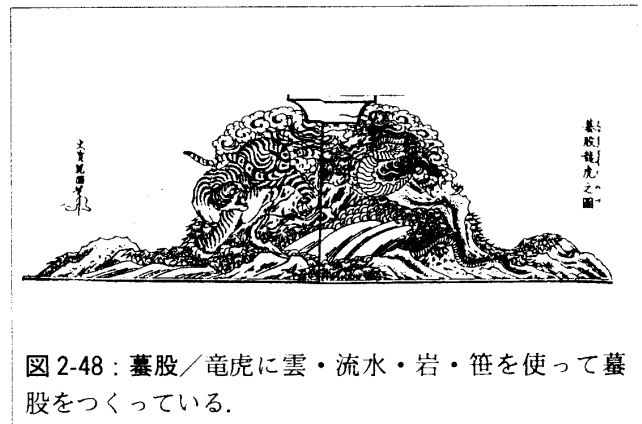


図 2-48: 墓股 / 竜虎に雲・流水・岩・筐を使って墓股をつくっている。

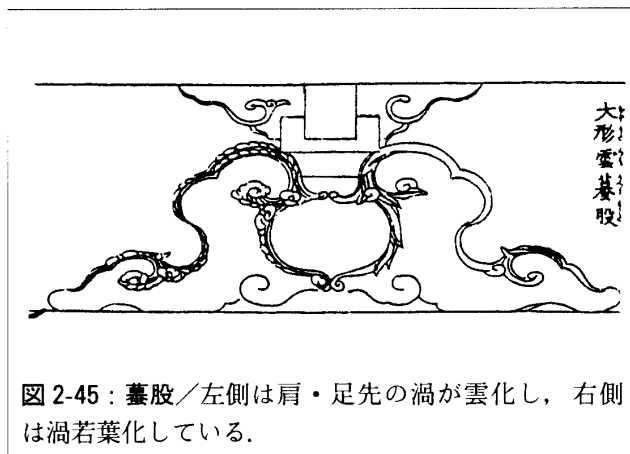


図 2-45: 墓股 / 左側は肩・足先の渦が雲化し、右側は渦若葉化している。

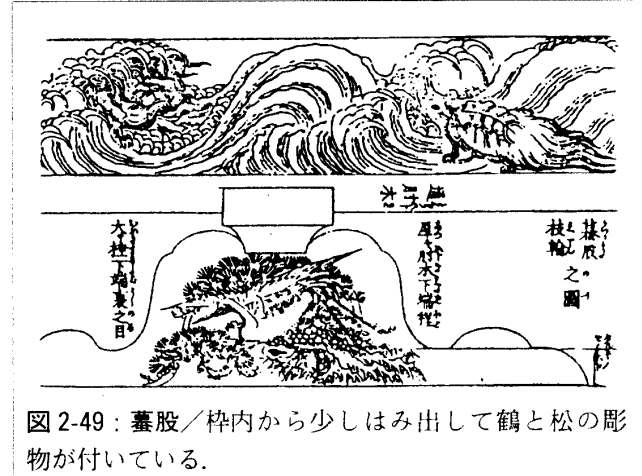


図 2-49: 墓股 / 枠内から少しはみ出して鶴と松の彫物が付いている。

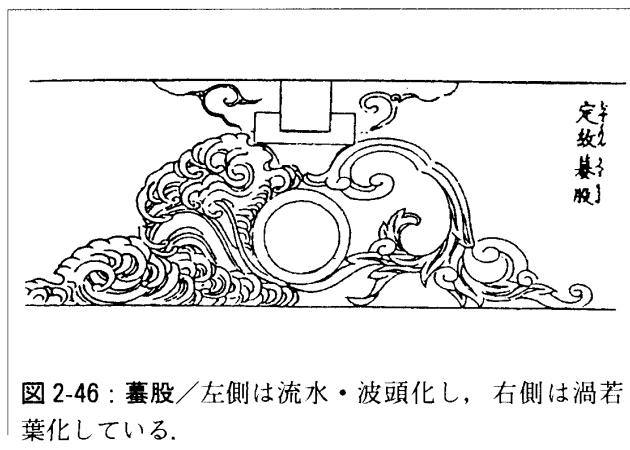


図 2-46: 墓股 / 左側は流水・波頭化し、右側は渦若葉化している。

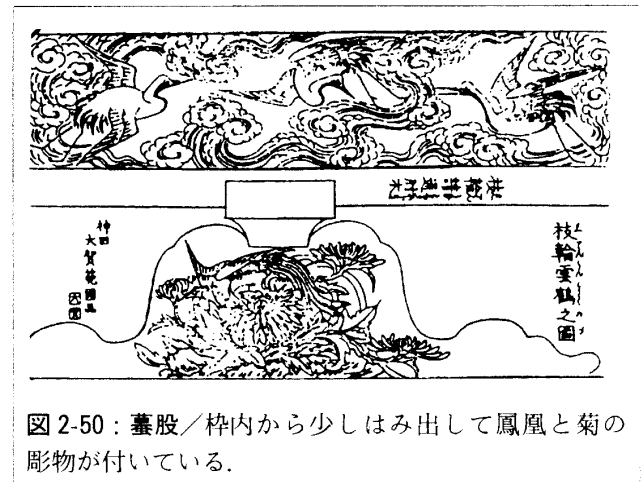


図 2-50: 墓股 / 枠内から少しはみ出して鳳凰と菊の彫物が付いている。

また藁股・笈形絵様を詳細に検討した結果について、その特徴を簡単にまとめたのが表2である。

表2 木割書における藁股・笈形絵様

No.	絵様雛形書名	藁股・笈形	特徴	
01	大匠雛形 彫物絵本	藁股	通常形	
02		藁股	肩、足元内側に渦付木鼻	
03		笈形	肩に渦付木鼻、足元内側および足先は菊葉	
04	匠家絵様集	藁股	腰内側に線形	
05		笈形	肩・肩内側に渦付木鼻、足元内側に線形	
06		藁股	肩に渦付線形、足元内側に線形	
07		藁股	通常形	
08		藁股	肩に渦、足先くびれ無し、杵内格狭間	
09		藁股	通常形	
10		藁股	肩に渦付木鼻、足先が長く伸びる	
11		藁股	肩・足元内側に渦付木鼻	
12		藁股	肩に長い線形、足にくびれ2つ、腰内側に渦	
13		藁股	肩に渦付木鼻、足先が長く伸びる	
14		藁股	肩に渦付木鼻、杵内格狭間	
15		藁股	足先にくびれ無し、板藁股	
16		新撰雛形 五 絵様	藁股	藁股足元内側に渦付木鼻
17			藁股	肩・足元内側・足先に渦付木鼻、杵内格狭間
18			笈形	腰から下が植物葉、葉先の一部が渦玉
19	笈形		全体が雲水化	
20	笈形		肩に2段渦付木鼻、腰と足元内側・足先に渦付木鼻	
21	笈形		肩に2段渦付木鼻、腰・足元内側に渦付木鼻、足先に渦若葉付木鼻	
22	笈形		左：肩・腰内外に渦付木鼻、足元内側に渦付木鼻2つ 右：肩・腰外側に渦付木鼻、腰内側に渦付木鼻2つ	
23	笈形		左：肩・腰内外・足元内側に渦付木鼻 右：肩に2段渦付木鼻、腰の内外・足先に渦付木鼻	
24	笈形		全体が植物葉化	
25	笈形		全体が雲水・渦化	
26	笈形		肩に2段渦付木鼻、腰の渦付木鼻で切れ、足元内側に2つの渦付木鼻、足先に渦付木鼻	
27	笈形		全体が植物葉化、葉先の一部が渦玉	
28	大和絵様集 四	笈形	左：肩・腰内側・足先に渦付木鼻、右：全体が雲水化	
29		藁股	全体が「葉」化	
30		藁股	左：肩・腰内側に渦付木鼻、足先に「渦若葉」付木鼻 右：肩・腰内側に「雲水」、足先に波頭、杵内格狭間	
31		藁股	肩・腰内側・足先に「捲雲」付木鼻、杵内格狭間	
32		藁股	肩に渦若葉付木鼻、足元内側・足先に渦付木鼻、足先が長く伸び、杵内格狭間	
33		藁股	肩・腰内側に「単渦」付木鼻、足先が長く伸び、杵内格狭間	
34		藁股	通常形	

35	彫工雛形	欄 間	龍の彫物
36	当世いろは絵様集	蔓股	肩・腰内側・足先に渦付木鼻, 枠内格狭間
37		蔓股	肩に渦付木鼻, 蔓股・斗・肘木が一体化, 枠内盲連子
38		蔓股	肩に渦, 足元内側に渦付木鼻, 枠内格狭間
39		蔓股	全体が若葉化, 葉先の一部が渦玉
40		蔓股	全体が流水・波頭化, 左右非対称形
41		蔓股	全体が雲化, 左右非対称形
42		笈形	全体が雲水化
43	大工絵様雑工雛形	蔓股	蔓股「司馬温公図」の彫物
44		蔓股	肩・足元内側・足先に渦付木鼻, 枠内格狭間
45		蔓股	左: 肩・足先の渦が雲化 右: 渦若葉化
46		蔓股	左: 流水・波頭化 右: 渦若葉化
47		蔓股	唐獅子に牡丹・菊・流水・輪違, 左右非対称形
48		蔓股	竜虎に雲・流水・岩・笹, 左右非対称形
49		蔓股	鶴と松の彫物, 左右非対称形
50		蔓股	鳳凰と菊の彫物, 左右非対称形

2-1 絵様の変遷

表1の大工雛形書に掲載されている蔓股・笈形絵様をすべて取り上げ、その特徴をみてきた。さらに表2において木割書における蔓股・笈形絵様を検討した結果、麓氏の指摘と一部重複するが、以下の点を指摘することができる。

- 1) 蔓股の肩および足元内側に渦付木鼻が付くのは、少なくとも大工雛形（1714年）以降に一般的となる。
- 2) 笈形が植物化したり、雲水化するのはい新撰雛形（1760）以降であり、笈形の擬態化は蔓股より先行する。
- 3) 蔓股の肩および足元内側を雲、腰を流水、足先を波頭でまとめたのは大和絵様集（1763年）が最初である。また大和絵様集以降、足先が伸びる傾向がみられる。さらに大和絵様集において、蔓股全体が「葉」「渦若葉」「雲水」「捲雲」「単渦」などのデザインで表現された例が見い出される。
- 4) 当世いろは絵様集（1834）で左右非対称形の流水・波頭、雲水の蔓股がはじめてあらわれる。

5) 雑工雛形（1850）で「司馬温公図」のような故事を題材にした蔓股、唐獅子に牡丹・流水・輪違などでデザインされた蔓股、竜虎に雲・流水・岩・笹などでデザインされた蔓股、枠内からややみ出して松と鶴、菊と鳳凰などの彫物で飾られた蔓股などがあらわれる。

このように木割書における蔓股・笈形は、全体として、肩・腰・足先の単純なデザインのものから、蔓股・笈形の原形を失わんばかりに植物形・天象形・動物形で擬態化され、より複雑化なデザインのものへと変遷しているといえよう。

2-2 絵様の分類

木割書における蔓股・笈形絵様を分類すると、大きくA・B・C・Dの4つのタイプに分けることができる。

Aタイプ：肩と足先にくびれをもち、腰が同じ幅で延びている通常形のもの。

Bタイプ：肩および腰内側または足元内側に木鼻が付き、枠内が格狭間になっているもの。

Cタイプ：全体が植物形または天象形、ある

いは両者が複合化されたもの。

Dタイプ：全体が動物形，植物形，天象形などで左右非対称形に構成され，より具象化されたもの。

A・Bタイプ墓股の初出は『大匠雛形 彫物絵本』（正徳4・1714年）であり，Cタイプは笈形の初出が『大匠雛形 彫物絵本』，墓股の初出が『新撰雛形 五』（宝暦10・1760年）であり，Dタイプ墓股の初出は『雑工雛形』（嘉永3・1850年）である。

3. 横田氏の建築作品にみる墓股・笈形絵様

横田氏が手掛けた建築作品にみられる墓股・笈形絵様について詳細にみると，以下のようになる。

①菅谷神社本殿（寛保2・1742年）：図3-1参照

向拝水引虹梁上墓股は肩にくびれをもち，腰は同じ幅で延び，足先にもくびれをもった一般的な通常形である。また枠の外側には鎬，内側には眉が付けられている。枠内には波の彫刻が施されている。身舎の墓股枠内には菊や竹などの彫刻が施されている。

②貝谷観音堂（延享4・1747年）：図3-2参照

向拝正面虹梁上墓股は，菅谷神社本殿向拝墓股と同様に一般的な通常形のものである。

③普賢寺山門（寛延2・1749年）：図3-3～4参照

正面控柱筋虹梁上墓股は通常形であり，枠内は盲連子となっている。中央親柱筋虹梁上墓股は肩に渦若葉付木鼻が付き，腰内側に渦が付き，枠内が格狭間になっている。

④宝蔵寺客殿（天明2・1782年）：図3-5参照

来迎柱筋虹梁上墓股は通常形であり，枠内に菊の彫刻が施されている。

⑤法伝寺本堂（文化2・1805年）：図3-6参照

内外陣境墓股は通常形であり，枠内に菊（向かって左），牡丹（向かって右）が彫刻されている。

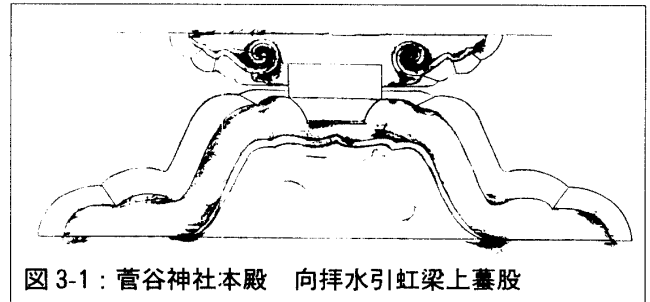


図3-1：菅谷神社本殿 向拝水引虹梁上墓股

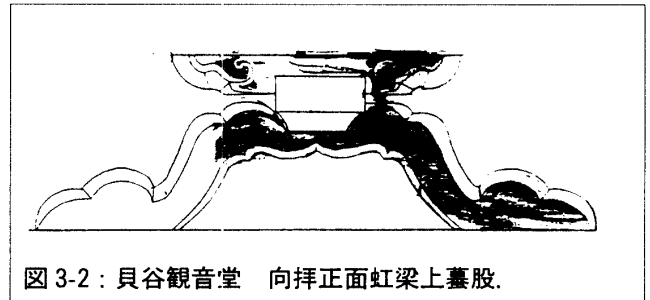


図3-2：貝谷観音堂 向拝正面虹梁上墓股。

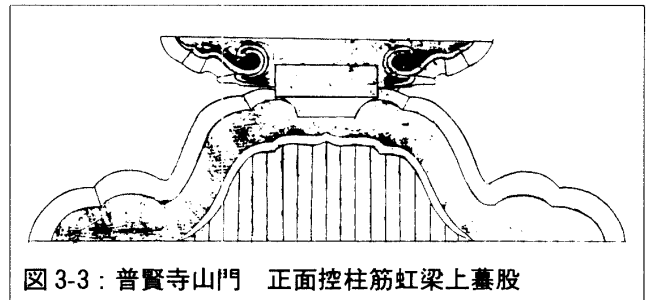


図3-3：普賢寺山門 正面控柱筋虹梁上墓股

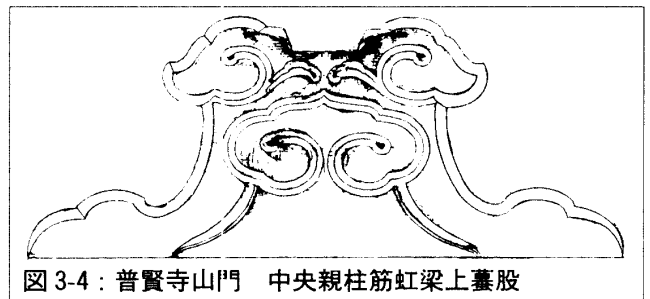


図3-4：普賢寺山門 中央親柱筋虹梁上墓股



図3-5：宝蔵寺客殿 来迎柱筋虹梁上墓股

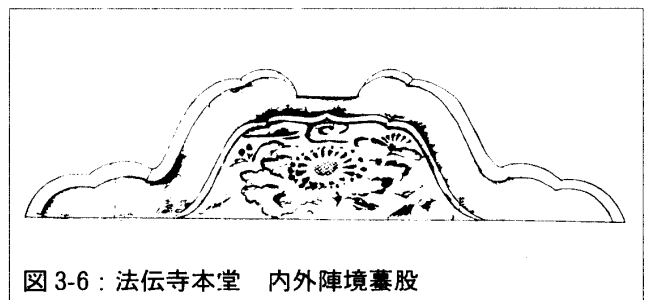


図3-6：法伝寺本堂 内外陣境墓股

⑥菅船神社本殿（文化14・1817年）：図3-7～12参照

向拝水引虹梁上墓股は通常形であるが、枳内が格狭間になっている。身舎墓股も通常形であり、正面枳内に牡丹、側面に菊、背面に桜が彫刻されている。床下墓股は変形している。正面は足元内側に線形が付き、枳内が格狭間になっている。背面は肩に渦付木鼻、腰内側に線形が付き、枳内が格狭間になり、その内側は盲連子となっている。側面は通常形の墓股枳内側に格狭間（内側盲連子）とその下に連続して2つの渦が対称に接して付いている。また笈形は全体が菊と葉でデザインされている。横田氏の建築作品の中で笈形全体が植物形で彫刻された最初の例である。

⑦蛭沢稲荷神社本殿（文政2・1819年）：図3-13参照

妻飾の笈形は全体に彫刻化が進み、流水・波頭・雲でデザインされ、左右非対称形となっている。横田氏の建築作品の中で、笈形全体が左右非対称形に彫刻された最初の例である。

⑧龍穩院本堂（天保2・1831年）：図3-14参照

玄関妻飾の笈形は全体に彫刻化が進み、雌雄の唐獅子と牡丹でデザインされ、左右非対称形

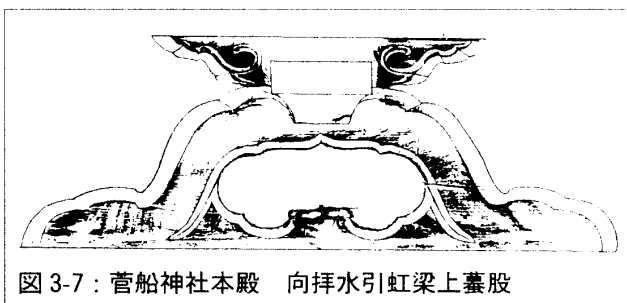


図3-7：菅船神社本殿 向拝水引虹梁上墓股

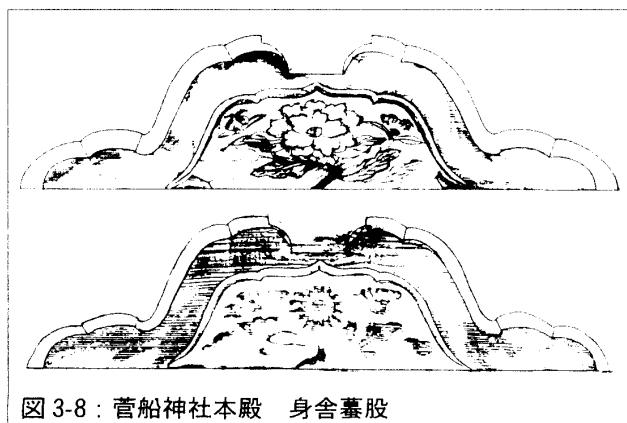


図3-8：菅船神社本殿 身舎墓股

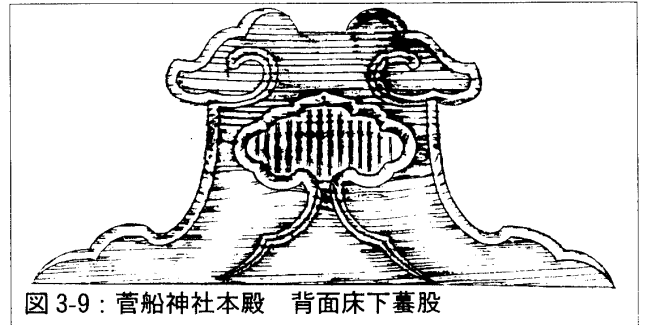


図3-9：菅船神社本殿 背面床下墓股

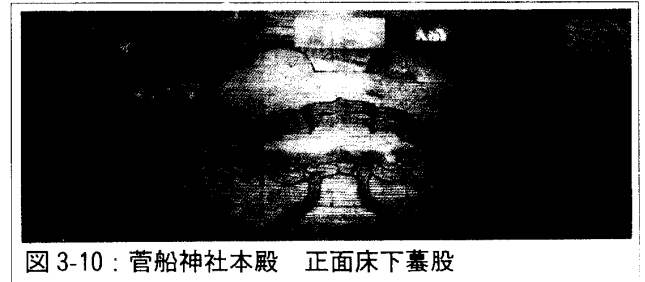


図3-10：菅船神社本殿 正面床下墓股



図3-11：菅船神社本殿 側面床下墓股



図3-12：菅船神社本殿 妻飾笈形



図3-13：蛭沢稲荷神社本殿 妻飾笈形



図3-14：龍穩院本堂 玄関妻飾欄間笈形

となっている。また玄関正面虹梁上には龍の欄間彫刻が入っていて、これは横田氏の建築作品の中で最初の例である。

⑨浮金観音堂（天保5・1834年）：図3-15～17参照

身舎墓股には2種類あり、1つは通常形の墓股枠内に植物の葉がデザインされ、他の1つは肩と足先に渦付木鼻が付き、枠内が格狭間になっている。また向拝水引虹梁上には欄間彫刻として龍の彫刻が入っている。

⑩地藏院本堂（天保11・1840年）：図3-18参照
内外陣境墓股は通常形であり、枠内に盲連子が彫られている。

⑪昌源寺本堂（嘉永2・1849年）：図3-19参照
身舎墓股は全体が若葉化し、葉先の一部が渦玉になっている。枠内は格狭間になっている。横田氏の建築作品の中で墓股全体が植物形で彫刻された最初の例である。

⑫飯豊神社拝殿（嘉永4・1851年）：図3-20参照

向拝水引虹梁上墓股は、全体が彫刻化され、肩に雲、腰から下は流水に波頭となっている。

⑬子鋤倉神社社殿（嘉永4・1851年）：図3-21～23参照

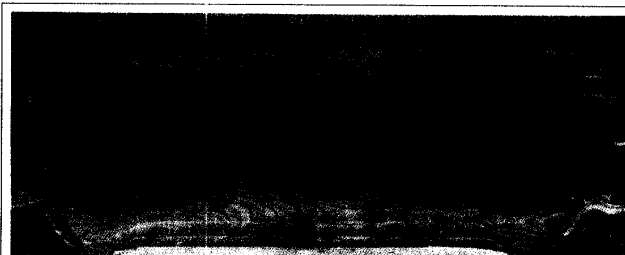


図3-17：浮金観音堂 向拝虹梁上欄間

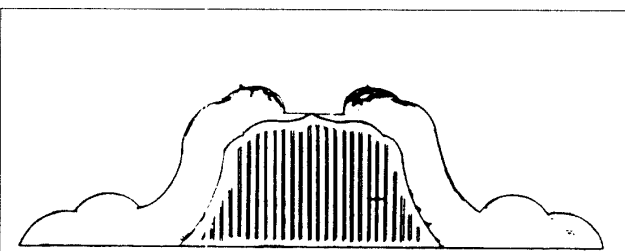


図3-18：地藏院本堂 内外陣境墓股

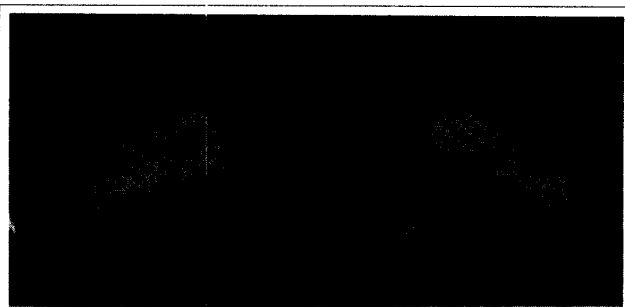


図3-19：昌源寺本堂 身舎墓股

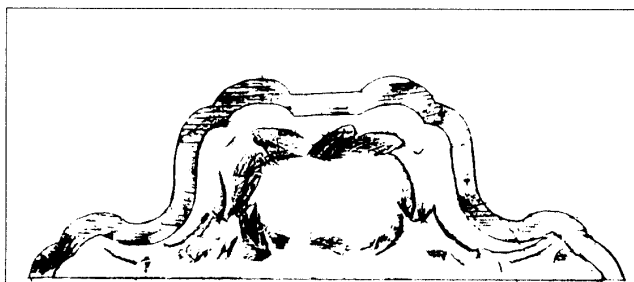


図3-15：浮金観音堂 身舎墓股

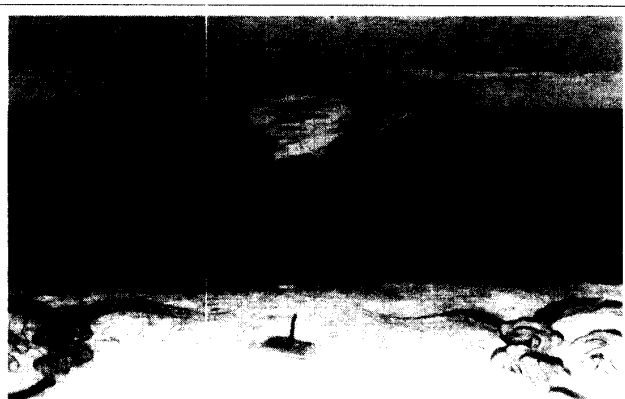


図3-20：飯豊神社拝殿 向拝水引虹梁上墓股

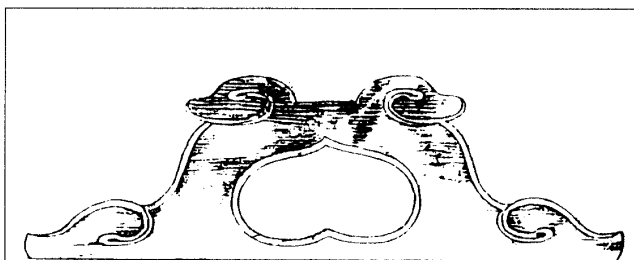


図3-16：浮金観音堂 身舎墓股



図3-21：子鋤倉神社社殿 水引虹梁上墓股

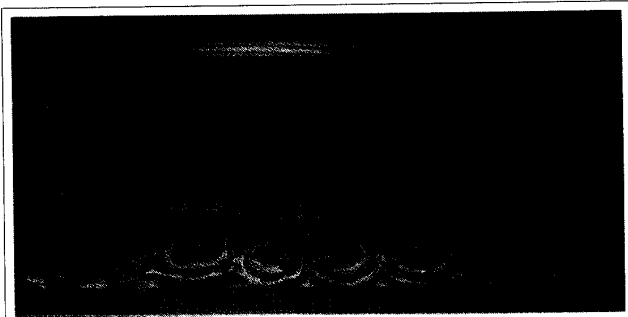


図 3-22 : 子楯倉神社社殿 身舎墓股

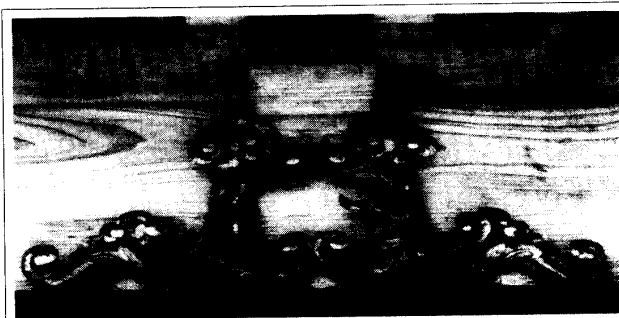


図 3-24 : 満福寺鐘楼 鐘楼腰組間墓股

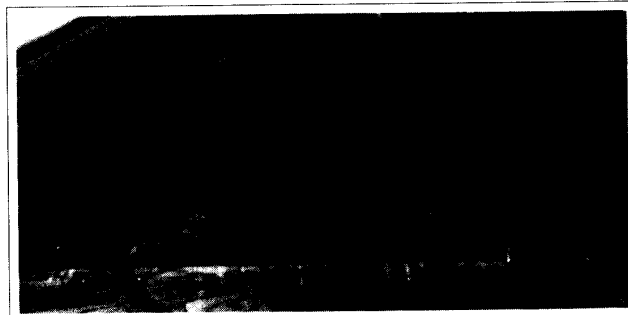


図 3-23 : 子楯倉神社本殿 妻飾笈形



図 3-25 : 駒形神社本殿 妻飾笈形

拝殿水引向拝上には全体が松と鷹でデザインされた墓股があり、左右非対称形となっている。横田氏の建築作品の中で、墓股に動物形のデザインが用いられた最初の例である。本殿身舎墓股は、全体が渦若葉で彫刻化されている。本殿妻飾笈形は流水・波頭で彫刻化されている。

⑭満福寺鐘楼（万延2・1861年）：図3-24参照

鐘楼腰組間墓股は、全体が彫刻化され、肩に雲、腰からは渦若葉となっている。

⑮駒形神社本殿（明治6・1873年）：図3-25参照

妻飾の笈形は、全体が雲水のデザインで彫刻化されていて、左右非対称形になっている。

⑯鹿島神社拝殿（明治15・1882年）：図3-26～27参照

拝殿向拝水引虹梁上墓股は、全体が流水・波頭のデザインで彫刻されている。また拝殿身舎墓股は、肩足元内側、足上側に繰形が付き、足が随分長く伸びている。

⑰五斗蒔延命地藏堂（明治22・1889年）：図3-28参照

向拝正面虹梁上墓股は、全体が雲水のデザインで彫刻化され、左右非対称となっている。



図 3-26 : 鹿島神社拝殿 向拝水引虹梁上墓股

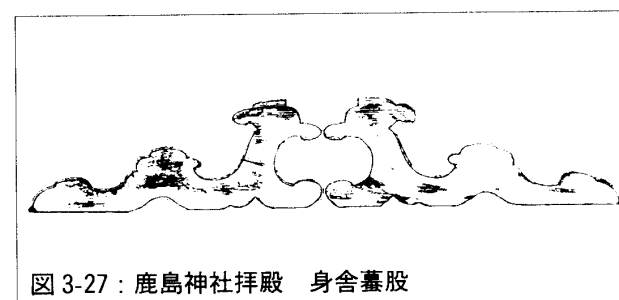


図 3-27 : 鹿島神社拝殿 身舎墓股



図 3-28 : 五斗蒔延命地藏堂 向拝正面虹梁上墓股

⑱剛叟寺本堂（明治22・1889年）：図3-29 参照

向拝虹梁上墓股は、全体が唐草のデザインで彫刻化され、枠内には卍の彫刻が入っていて、足が長く伸びている。

⑲宇佐八幡神社拝殿（明治23・1890年）：図3-30～31 参照

向拝繫虹梁上墓股は、全体が松と山鳩のデザインで彫刻化されていて、左右非対称形になっている。また向拝水引虹梁上には龍の欄間彫刻が入っている。また身舎墓股は、全体が雲水のデザインで彫刻化されている。

⑳熊倉神社拝殿（明治25・1892年）：図3-32～33 参照

向拝一重虹梁上墓股は、全体が雲水のデザインで彫刻化され、宇佐八幡神社拝殿身舎の墓股に酷似している。また二重虹梁上笄形は、肩が雲、腰から足先にかけて唐草、足内側に渦玉のデザインで彫刻化されている。

㉑古峰神社拝殿（明治31・1898年）：図3-34 参照

向拝繫虹梁上の墓股は、水鳥と水草のデザインで彫刻化されている。また向拝水引虹梁上は龍の欄間彫刻が入っている。

㉒郎山神社本殿（明治37・1904年）：図3-35～37 参照

向拝水引虹梁上墓股は、肩に渦付木鼻、腰内側に繰形、長く伸びた足上部に渦付繰形、足先に繰形が付いている。身舎妻側墓股は、形に渦付木鼻、腰から足にかけては全体が唐草化している。妻飾の笄形は、肩に渦付木鼻、足先に渦玉が付いている。

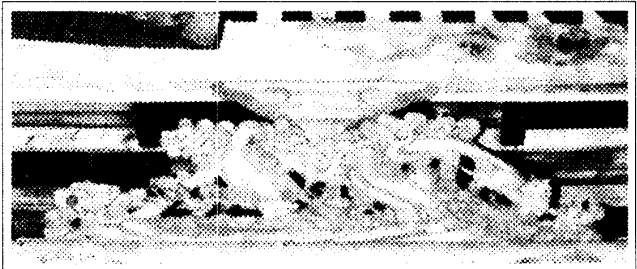


図3-30：宇佐八幡神社拝殿 向拝繫虹梁上墓股



図3-31：宇佐八幡神社拝殿 身舎墓股

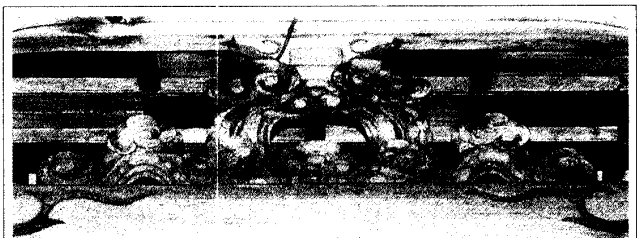


図3-32：熊倉神社拝殿 向拝一重虹梁上墓股



図3-33：熊倉神社拝殿 向拝二重虹梁上笄形



図3-34：古峰神社拝殿 向拝繫虹梁上墓股

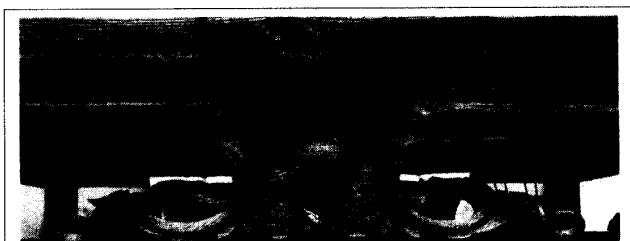


図3-29：剛叟寺本堂 向拝正面虹梁上墓股

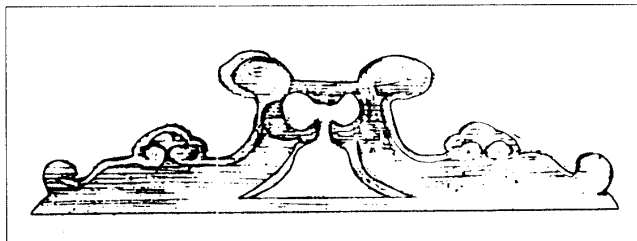


図3-35：郎山神社本殿 向拝水引虹梁上墓股

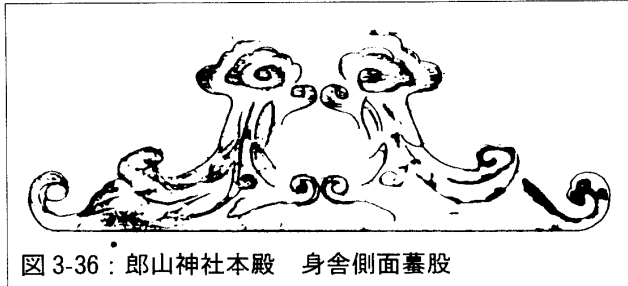


図 3-36 : 郎山神社本殿 身舎側面臺股

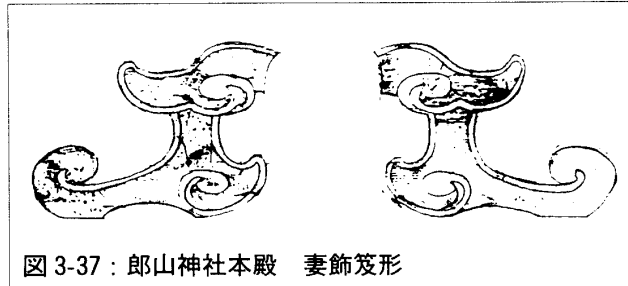


図 3-37 : 郎山神社本殿 妻飾笈形

3-1 臺股・笈形絵様の変遷

横田氏が手掛けた建築作品にみられる臺股・笈形絵様を詳細に検討した結果、以下のような点が指摘される。

臺股絵様

- 1) 臺股枠内に彫刻が彫られた最初の例は菅谷神社本殿（寛保2・1742年）臺股であり、波、菊、竹が彫られている。また菊のデザインは宝蔵寺客殿・法伝寺本堂・菅船神社本殿にも用いられ、その他の枠内彫刻のデザインとして牡丹・桜（菅船神社本殿）、卍（剛叟寺本堂）などがある。
- 2) 通常形の臺股から最初に変化した例は、普賢寺山門（寛延2・1749年）臺股であり、肩に渦若葉付木鼻が付いている。また枠内が格狭間の形になっていて、普賢寺山門臺股が最初の例である。これ以後、菅船神社本殿（文化14・1817年）、浮金観音堂（天保・1834年）、鹿島神社拝殿（明治15・1882年）にも用いられた。
- 3) 臺股全体が彫刻化された最初の例は、昌源寺本堂（嘉永2・1849年）臺股であり、雲・若葉のデザインが用いられている。その他に飯豊神社拝殿（嘉永4・1851年）の雲・流水・波頭、子鋤倉神社本殿（嘉永4・1851年）の渦若葉、満福寺鐘楼（万延2・1861

年）の雲・渦若葉、駒形神社本殿（明治5・1873年）の雲水、鹿島神社拝殿（明治15・1882年）の流水・波頭、五斗蒔延命地藏堂（明治22・1889年）の雲水、剛叟寺本堂（明治22・1889年）、宇佐八幡神社拝殿（明治23・1890年）および熊倉神社拝殿（明治25・1892年）の雲水、郎山神社本殿（明治37・1904年）の雲・渦若葉などのデザインを用いている。

- 4) 臺股全体が左右非対称形で彫刻化された最初の例は、子鋤倉神社拝殿（嘉永4・1851年）臺股の松と鷹の彫刻である。その他に宇佐八幡神社拝殿の松と山鳩、古峰神社拝殿（明治31・1898年）の水草と水鳥などのデザインがある。左右非対称形のデザインには動物形と植物形の複合されたものが多い。
- 5) 臺股の足部分が長く伸びた最初の例は、鹿島神社拝殿臺股である。概して全体が植物化（若葉）したり天象化（流水・波頭、雲水）した臺股は足が伸びる傾向にある。

笈形絵様

- 1) 笈形全体が彫刻化された最初の例は、菅船神社本殿（文化14・1817年）妻飾笈形であり、菊と葉でデザインされている。
- 2) 笈形全体が左右非対称形に彫刻された最初の例は、蝦沢稲荷神社本殿（文政2・1819年）妻飾笈形の流水・波頭・雲であり、その他に龍穩寺本堂（天保2・1831年）の唐獅子と牡丹、駒形神社本殿（明治6・1873年）の雲水などのデザインがある。
- 3) 全体が彫刻化されたのは、数少ない例の中での判断であるが、臺股より笈形の方で先行したことがわかる。

絵様の変遷

横田氏が手がけた建築作品は、第1期（寛保2・1742年～文政元・1818年）、第2期（文政2・1819年～明治元・1868年）、第3期（明治2・1869年～大正15・1927年）に分けられる^{注4)}が、それぞれの時代の絵様の特徴を示せば、次のようになる。

第1期：通常形の臺股が主流で、一部に肩に

表3 横田氏の建築作品にみる墓股・笈形絵様

No.	建 物 名	建 築 年 代	墓 股 ・ 笈 形	特 徴
01	菅谷神社本殿	寛保2・1742	墓股	通常形, 枳内波, 菊, 竹の彫物
02	貝谷観音堂	延享4・1747	墓股	通常形
03	普賢寺山門	寛延2・1749	墓股	通常形, 枳内盲連子
04			墓股	肩に渦付木鼻, 腰内側に渦, 枳内格狭間
05	宝蔵寺客殿	天明2・1782	墓股	通常形, 枳内菊の彫物
06	法伝寺本堂	文化2・1805	墓股	通常形, 枳内菊の彫物
07	菅船神社本殿	文化14・1817	墓股	通常形, 枳内格狭間
08			墓股	通常形, 枳内牡丹, 菊, 桜の彫物
09			墓股	肩に渦付木鼻, 腰内側に縹形, 枳内格狭間, その内側盲連子
10			墓股	足元内側に縹形, 枳内格狭間
11			墓股	通常形, 枳内に格狭間, その下に渦2つ
12			笈形	全体が葉・菊
13	蝦沢稻荷神社本殿	文政2・1819	笈形	全体が雲・流水・波頭, 左右非対称形
14	龍穩寺本堂	天保2・1831	笈形	全体が唐獅子・牡丹
15	浮金観音堂	天保5・1834	墓股	通常形, 枳の内側若葉化
16			墓股	肩・足先に渦付木鼻, 枳内格狭間
17			欄間	龍の彫物
18	地藏院本堂	天保11・1840	墓股	通常形, 枳内盲連子
19	昌源寺本堂	嘉永2・1849	墓股	全体が若葉, 葉先一部渦玉, 枳内格狭間
20	飯豊神社拝殿	嘉永4・1851	墓股	全体が雲・流水・波頭
21	子歙倉神社拝殿	嘉永4・1851	墓股	全体が松と鷹, 左右非対称形
22	本殿	嘉永4・1851	墓股	全体が渦若葉
23	満福寺鐘楼	万延2・1861	墓股	全体が雲・渦若葉
24	駒形神社本殿	明治6・1873	笈形	全体が雲水, 左右非対称形
25	鹿島神社拝殿	明治15・1882	墓股	肩・足元内側・足上側に縹形, 足が長く伸び, 枳内格狭間
26			墓股	全体が流水・波頭
27	五斗蒔延命地藏堂	明治22・1889	墓股	全体が雲水
28	剛叟寺本堂	明治22・1889	墓股	全体が渦若葉
29	宇佐八幡神社拝殿	明治23・1890	墓股	全体が雲水
30			墓股	全体が松と山鳩, 左右非対称形
31	熊倉神社拝殿	明治25・1892	墓股	全体が雲水
32			笈形	肩が雲, 腰内側が渦玉, 腰・足先が若葉
33	古峰神社拝殿	明治31・1898	墓股	全体が水草と水鳥
34	郎山神社本殿	明治37・1904	墓股	肩・足上側に渦付縹形, 腰内側に縹形
35			墓股	肩に渦付木鼻, 腰から下は渦若葉
36			笈形	肩・腰内側に渦付木鼻, 足先渦玉

渦付木鼻が付いたり、枠内が格狭間になったものがあらわれた。

第2期：墓股は、渦若葉や流水・波頭などのデザインが主流になり、植物形と動物形が複合化されたデザインもあらわれる。笈形は、雲、雲水・波頭、唐獅子・牡丹などの左右非対称形のデザインがあらわれる。この時期において、横田氏が新しいデザインに果敢に挑戦する姿勢が見て取れる。

第3期：墓股・笈形とも、前期のデザインを踏襲しながらも、さらに賑やかに彫刻化される傾向が強くなった。

3-2 横田氏の墓股・笈形絵様と木割書における絵様との比較

横田氏が手掛けた建築作品にみられる墓股・笈形絵様と木割書における墓股・笈形絵様を比較すると、以下のような点が指摘される。

- 1)木割書における墓股絵様は通常形→肩、腰・足元内側、足先に線形付→全体が植物形、天象形に彫刻化→全体が左右非対称形に具象彫刻化（動物形、植物形、天象形デザインの複合化）というように変遷したが、横田氏の墓股絵様も同様であった。
- 2)横田氏の墓股の肩、腰に線形が付いたのは普賢寺山門（寛延2・1749年）墓股であるが、木割書では『大匠雛形 彫物絵本』（正徳4・1714年）にすでにみられる。
- 3)横田氏の墓股全体が彫刻化されたのは昌源寺本堂（嘉永2・1849年）墓股であるが、木割書では『大和絵様集』（宝暦13・1763年）にすでにみられる。
- 4)横田氏の墓股全体が左右非対称形に彫刻されたのは子鋏倉神社拜殿（嘉永4・1851年）墓股であるが、木割書では『当世いろは絵様集』（天保5・1834年）にすでにみられる。
- 5)横田氏の笈形全体が彫刻化されたのは菅船神社本殿（文化14・1817年）笈形であるが、木割書では『大匠雛形 彫物絵本』（正徳4・1714年）にすでにみられる。
- 6)横田氏の笈形全体が左右非対称形に彫刻され

たのは蝦沢稻荷神社本殿（文政2・1819年）であるが、木割書では不明である。

このように横田氏の墓股・笈形絵様の変遷は、木割書における墓股・笈形絵様の変遷に対して少し遅れて同様の過程を経ていることがわかった。

4. 横田家大工文書にみる墓股・笈形絵様

横田家大工文書における墓股絵様は24点、笈形絵様は6点あるが、このうち名称が判明しているのは墓股7点、笈形1点である。

横田氏が大工文書に描いた墓股・笈形の特徴をまとめたのが表4である。この表に取り上げた墓股・笈形と実際の建築作品にみられる墓股・笈形と比較した結果、両者の類似性を指摘することができた。

墓 股

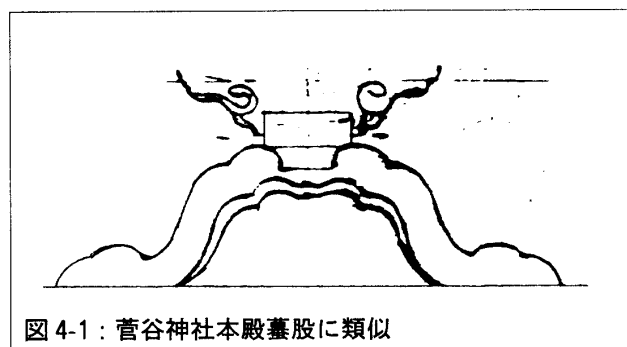


図 4-1：菅谷神社本殿墓股に類似

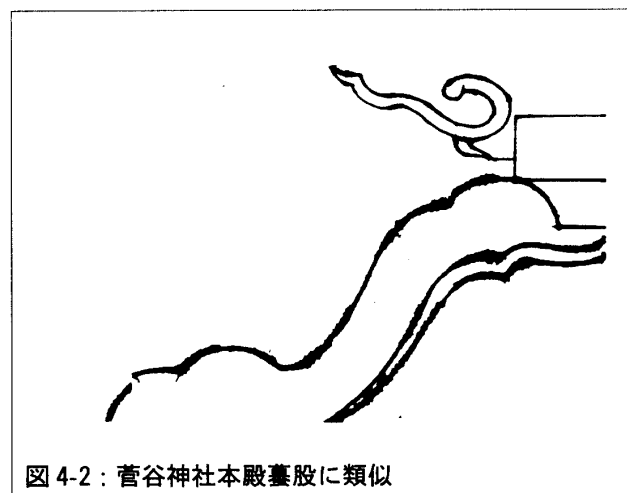


図 4-2：菅谷神社本殿墓股に類似

表4 横田家大工文書にみる墓股・笈形絵様

No.	建 物 名	判明・類似	墓股・笈形	特 徴
01	菅谷神社本殿	類似	墓股	通常形
02	同 上	類似	墓股	通常形
03	宝蔵寺客殿	類似	墓股	通常形
04	浮金観音堂	類似	墓股	肩・足元内側・足先に渦付木鼻
05	同 上	類似	墓股	肩・足先に渦付木鼻，腰内側に線形
06	同 上	類似	墓股	肩・足先に渦付木鼻，腰内側に線形
07	昌源寺本堂	類似	墓股	腰から下が渦若葉
08	同 上	類似	墓股	腰から下が渦若葉
09	同 上	判明	墓股	全体が渦若葉
10	同 上	判明	墓股	全体が渦若葉
11	同 上	判明	墓股	全体が雲水
12	飯豊神社拝殿	判明	墓股	肩が雲，腰から下は渦若葉
13	同 上	判明	墓股	肩が雲，腰から下が流水・波頭
14	同 上	類似	墓股	肩が渦付気花木鼻，腰から下が渦若葉
15	同 上	類似	墓股	全体が渦若葉
16	同 上	類似	墓股	肩が渦付木鼻，腰から下が渦若葉
17	標葉神社本殿	判明	欄間	肩に雲，腰に巻雲，腰から下は渦若葉
18	同 上	判明	墓股	肩に雲，腰に巻雲，腰から下は渦若葉
19	同 上	類似	墓股	肩に雲，腰に巻雲，腰から下は渦若葉
20	鹿島神社拝殿	類似	墓股	全体が流水・波頭
21	宇佐八幡神社拝殿	類似	墓股	全体が雲水
22	同 上	類似	墓股	全体が雲水
23	郎山神社本殿	類似	墓股	肩が雲，腰から下が渦若葉
24	菅船神社本殿	類似	笈形	肩・腰・足元内側が菊葉，足先が菊花
25	同 上	類似	笈形	形・腰が菊葉，足元内側・足先が菊花
26	蝦沢稲荷神社本殿	類似	笈形	全体が流水・波頭
27	不 明		笈形	全体が渦若葉
28	駒形神社本殿	判明	笈形	全体が雲水
29	同 上	類似	笈形	全体が雲水
30	熊倉神社拝殿	類似	笈形	肩に雲，腰から下は若葉，足元内側渦玉

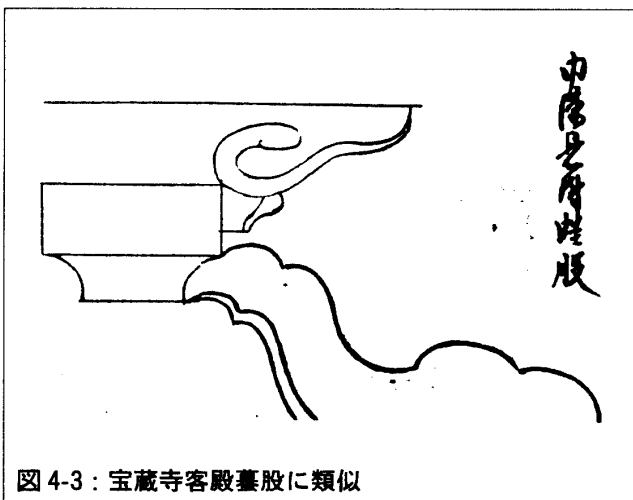


図4-3：宝蔵寺客殿墓股に類似

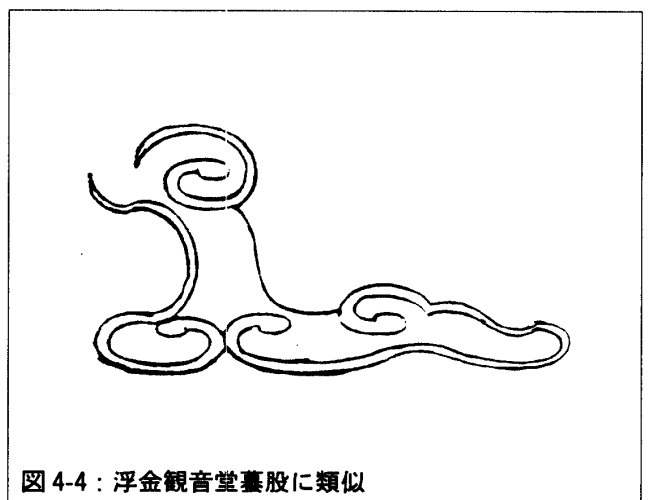


図4-4：浮金観音堂墓股に類似

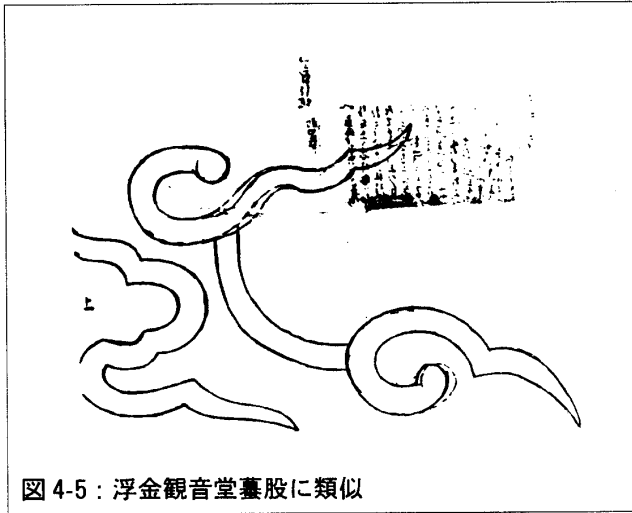


図 4-5 : 浮金観音堂墓股に類似

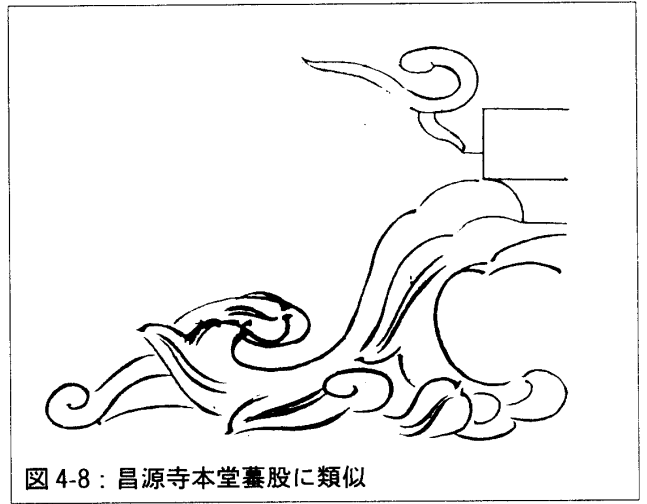


図 4-8 : 昌源寺本堂墓股に類似

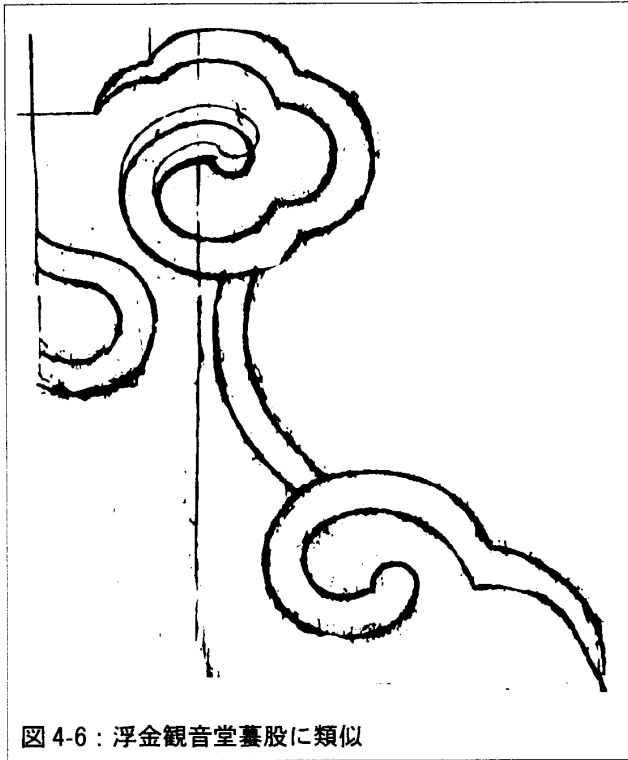


図 4-6 : 浮金観音堂墓股に類似

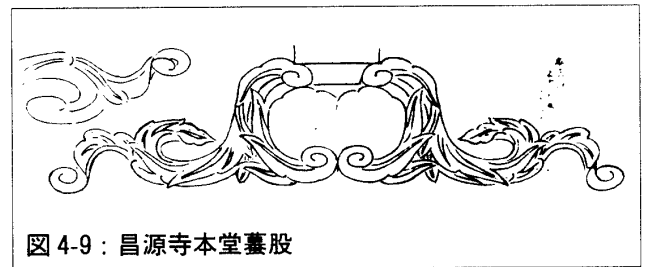


図 4-9 : 昌源寺本堂墓股

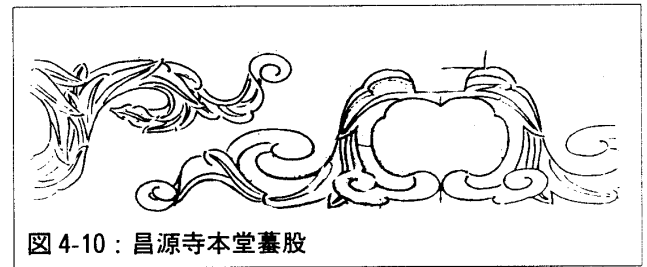


図 4-10 : 昌源寺本堂墓股

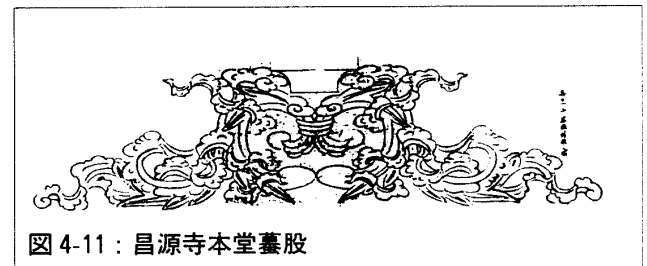


図 4-11 : 昌源寺本堂墓股



図 4-7 : 昌源寺本堂墓股に類似



図 4-12 : 飯豊神社拝殿墓股

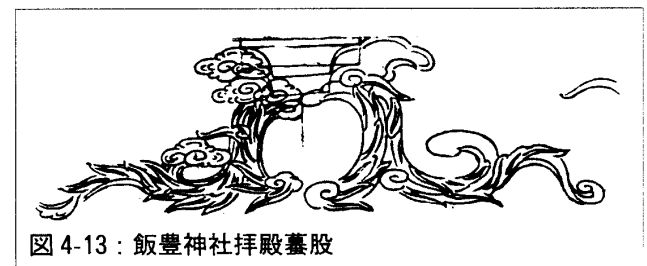


図 4-13 : 飯豊神社拝殿墓股



図 4-14 : 飯豊神社拝殿墓股に類似



図 4-19 : 標葉神社本殿墓股に類似



図 4-15 : 飯豊神社拝殿墓股に類似



図 4-20 : 鹿島神社拝殿墓股に類似



図 4-16 : 飯豊神社拝殿墓股に類似



図 4-21 : 宇佐八幡神社拝殿墓股に類似

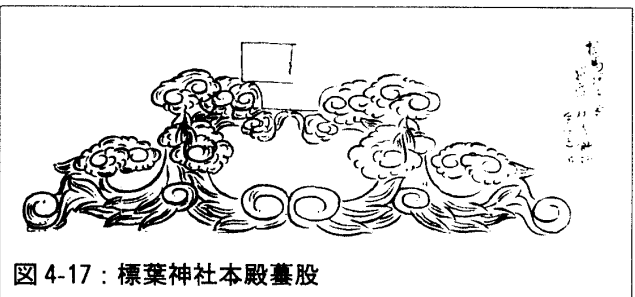


図 4-17 : 標葉神社本殿墓股

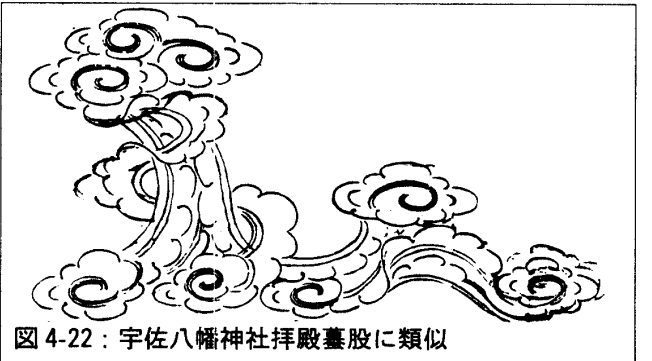


図 4-22 : 宇佐八幡神社拝殿墓股に類似

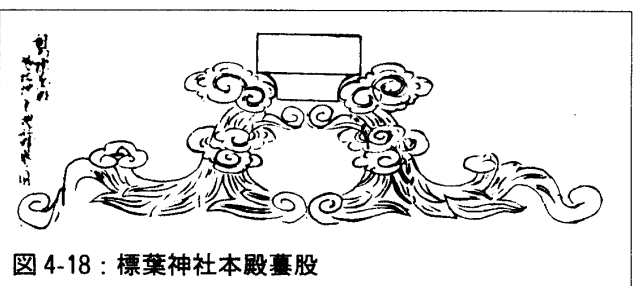


図 4-18 : 標葉神社本殿墓股



図 4-23 : 郎山神社本殿臺股に類似

笈形

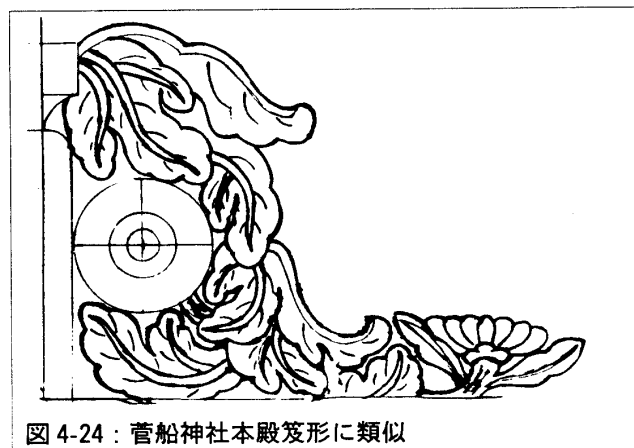


図 4-24 : 菅船神社本殿笈形に類似



図 4-25 : 菅船神社本殿笈形に類似



図 4-26 : 蝦沢稻荷神社本殿笈形に類似

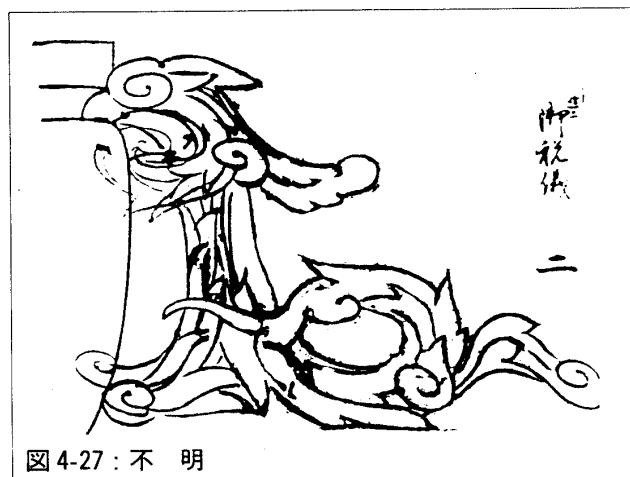


図 4-27 : 不明



図 4-28 : 駒形神社本殿笈形

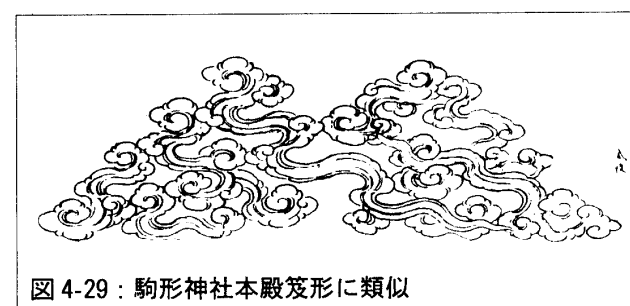


図 4-29 : 駒形神社本殿笈形に類似

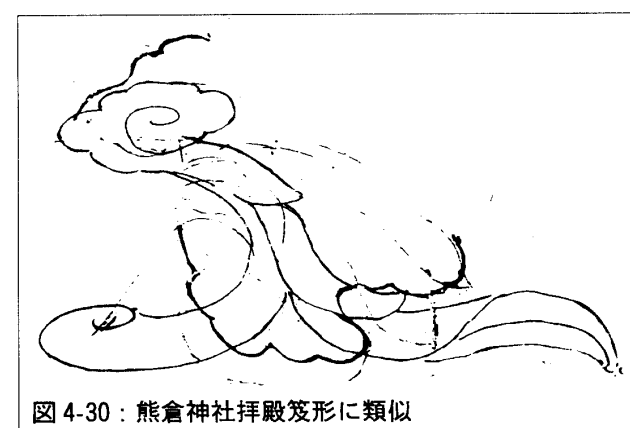


図 4-30 : 熊倉神社拜殿笈形に類似

5. 結 論

これまでの考察を要約すると以下のようになる。

- (1) 雛形書における墓股・笈形絵様は肩・腰・足先の単純な形のものから、墓股の原形を失わんばかりのより複雑な形のものへと変遷した。
- (2) 雛形書における墓股・笈形絵様を分類すると、大きく4つに分けることができる。
 Aタイプ：肩と足先にくびれをもち、腰が同じ幅の枠になっている通常形のもの。
 Bタイプ：肩および腰内側または足元内側に木鼻が付き、枠内が格狭間の形になっているもの。
 Cタイプ：全体が植物形または天象形、あるいは両者が複合化されたもの。
 Dタイプ：全体が動物形、植物形、天象形などから左右非対称形に構成され、より具象化されたもの。
- (3) 横田氏の建築作品にみられる墓股・笈形絵様は、雛形書と同様に、通常形→肩、腰・足元内側、足先に線形付→全体が植物形、天象形に彫刻化→全体が左右非対称形に具象彫刻化（動物形、植物形、天象形デザインの複合化）というように変遷した。

- (4) 横田氏の墓股・笈形絵様の変遷は、雛形書のそれより時期的に遅れる。
- (5) 横田氏の建築作品にみられる墓股・笈形絵様を通観すると、全盛期である第2期（文政2・1819年～明治元・1868年）において、横田氏が新しいデザインに果敢に挑戦している姿勢を読み取ることができる。
- (6) 遺構における墓股・笈形絵様との比較によって、横田家大工文書にみられる墓股・笈形絵様がほぼ特定された。

注

- 1) 拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について—横田家大工文書の研究(4)—」共栄学園短期大学研究紀要, 第15号, 1999年3月。
 拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について—横田家大工文書の研究(5)—」共栄学園短期大学研究紀要, 第16号, 2000年3月
- 2) 「匠家絵様集」「大工絵様雑工雛形」の墓股・笈形絵様は麓和善編著『日本建築古典叢書第9巻』（大龍堂, 1991年）から抜粋した。
- 3) 麓和善「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」（『建築史学』第14号, 1990年3月）PP.92
- 4) 拙稿「横田家大工文書の研究(1)」共栄学園短期大学研究紀要, 第11号, 1995年3月

SYNOPSIS

Consideration on the Design Style of "Kaerumata" and "Oikata" made by the Yokota Family, as the Master Builders of Kumo School

Dr.SHIRAI hiroyasu

The paper offers an analysis of and a consideration on the design style on the architectural documents and works by the master builders of the Kumo School, chaired by the Yokota Family during the period from late Edo to early Meiji.

As a result of our research about the design style of KAERUMATA and OIKATA, we can point out the following findings:

1. The design style of KAERUMATA and OIKATA at the model book changed into the more complicated-shaped one from the simple-shaped one.
2. The design style of KAERUMATA and OIKATA at the model book are classified into the following four. A: it is the one of the general form. B: they have KIBANA and inside of the frame like KOUZAMA-shaped one. C: The plant-shaped or nature-shaped one. D: The one which was

given concrete shape to and in the either side asymmetry form.

3. The design style of KAERUMATA and OIKATA which is seen in Yokota's architecture work changed like it at the model book.

4. The change of Yokota's the design style of KAERUMATA and OIKATA is behind more time than it of the model book.

5. Yokota is challenging actively the design of the new style of KAERUMATA and OIKATA in the primly days (1819-1868).

6. Most of the design style at the architectural documents by the Yokota family, as the master builders of the Kumo school was specified by the comparison with the design style of KAERUMATA and OIKATA in the remained Yokota's architecture work.